

### 3 古墳時代の調査

六日町藤塚遺跡の下層では礫層面の広がり、南北方向に延びる自然流路を検出しました。自然流路は金屋遺跡から藤塚遺跡を通り、余川中道遺跡<sup>よかわなかなちいせき</sup>の方向へ延びると考えられます。

また、この自然流路付近では土器集積遺構が散発的に見られます。現在確認している集積遺構は3基あり、いずれの遺構からも高杯・小型丸底壺<sup>たかつき こがたまるぞこつぼ</sup>などの土器のほか、石製装飾品（臼玉<sup>うすだま</sup>）が出土しています。これらの遺物がまとまって出土する状況は全国的にも見られるもので、川辺で行われた祭祀の痕跡と考えられます。

土器集積②では高杯の中から玉が出土していることから、臼玉や勾玉<sup>まがたま</sup>といった石製装飾品を土器の上に置いた状態で祈りをささげていたことが想定されます。このような出土状況は周辺調査で出土している土器集積遺構でも確認されています。

土器集積①・②の出土状況を見ると、個々の土器がほぼ原位置を保っているのに対し、土器集積③では土器が細かく割れていたり、異なる土器が上下に積み重なっている状況がわかります。このことは①・②では祭祀行為が行われ、③では祭祀行為後に使用した遺物を寄せ集めて集積した可能性をうかがわせます。

土器の年代を見ると土器集積①・②は古墳時代後期、土器集積③は古墳時代中期から後期と考えられます。

### 4 子持勾玉<sup>こもちまがたま</sup>

古墳時代中期頃から出現し、全国で約500点見つかっています。祭祀具と考えられていますが、単独で出土する事例が多く、竪穴建物からの出土も30例程度で、その用途は謎に包まれています。

県内では12例目で、魚沼地方では初めての出土です。このうち、出土状態の分かるものは当遺跡を含め5例しかなく、土器集積遺構の近くから出土したのは初めてです。

子持勾玉は滑石製で、長さ8.3cm、厚さ3.2cm、背と脇に小型勾玉形の小突起が2個ずつ、腹に1個付いています。

六日町藤塚遺跡では土器集積遺構から出土しており、子持勾玉の用途を検討するうえで貴重な発見です。



土器集積②



土器集積② 玉出土



土器集積③



土器集積①

## 南魚沼市六日町藤塚遺跡調査現地説明会資料

No



令和4年11月3日（木・祝）

公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

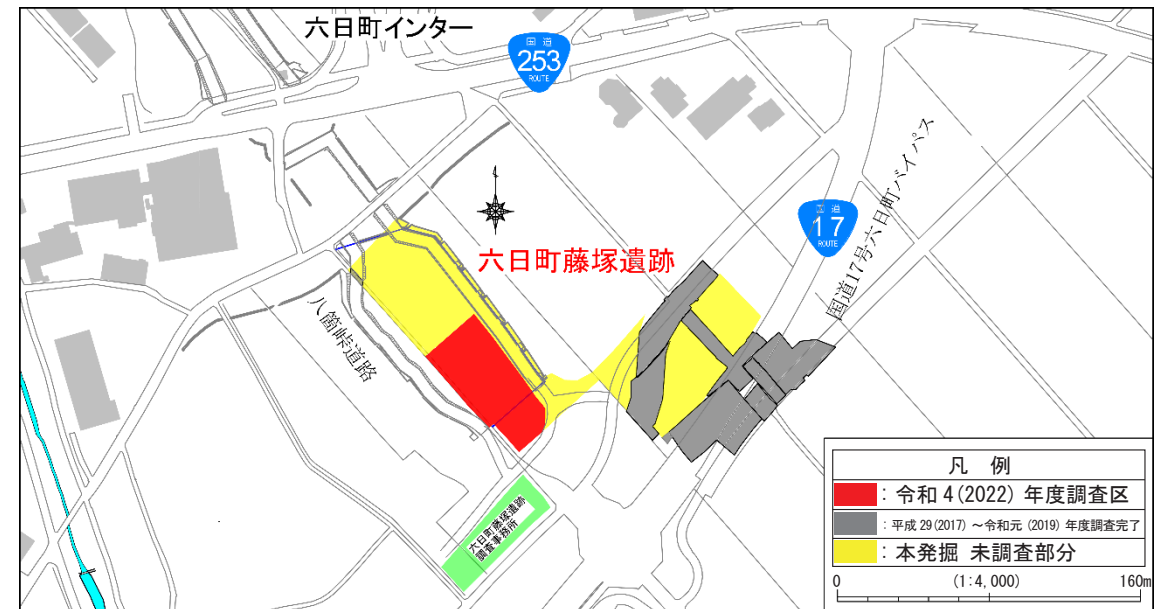
### 1 遺跡の概要

六日町藤塚遺跡は国道17号六日町バイパス及び国道253号八箇峠道路建設事業に伴い、発掘調査を実施しています。遺跡は、魚沼丘陵<sup>うおぬまきゅうりょう</sup>の東側、庄之又川<sup>しょうのまた</sup>によって形成された標高180mの扇状地上に立地しています。六日町藤塚遺跡の発掘調査は平成29年から始まり、今回が5回目の調査になります。これまでの調査では、古墳時代中期後半から後期前半（5世紀後半から6世紀前半）の集落で祭祀あるいは廃棄に伴う土器集積遺構や周堤が残る竪穴建物などが見つかっています。

令和4年度は下図の赤色範囲、延べ約5,958㎡（当初予定）の調査を実施しています。遺構面は、古墳時代後期（6世紀前半）、飛鳥時代から奈良時代（7世紀後半から8世紀初頭）、平安時代から中世（10世紀以降か）の3層あり、主体は古墳時代後期と飛鳥時代から奈良時代です。飛鳥時代から奈良時代の遺構はこれまでの調査で明確に発見できていなかったのですが、今回の調査で掘立柱建物が見つかり、古墳時代後期以降も断続的にこの地で集落が営まれていたことが明らかになったことは新たな発見です。



調査区全景（上空北東から）



六日町藤塚遺跡の発掘調査位置



## 2 飛鳥時代から奈良時代の調査

今年度の調査では、六日町バイパス側をⅠ区、八箇峠道路側をⅡ区と呼称しています。Ⅰ区・Ⅱ区では飛鳥・奈良時代の掘立柱建物、土坑、耕作溝、ピットなどの遺構を確認しました。

飛鳥時代・奈良時代の遺構確認面は砂質シルト層で、下層には礫層面が広がっています。この礫層は土石流や複数回の河川氾濫などによって形成されたと推察できます。

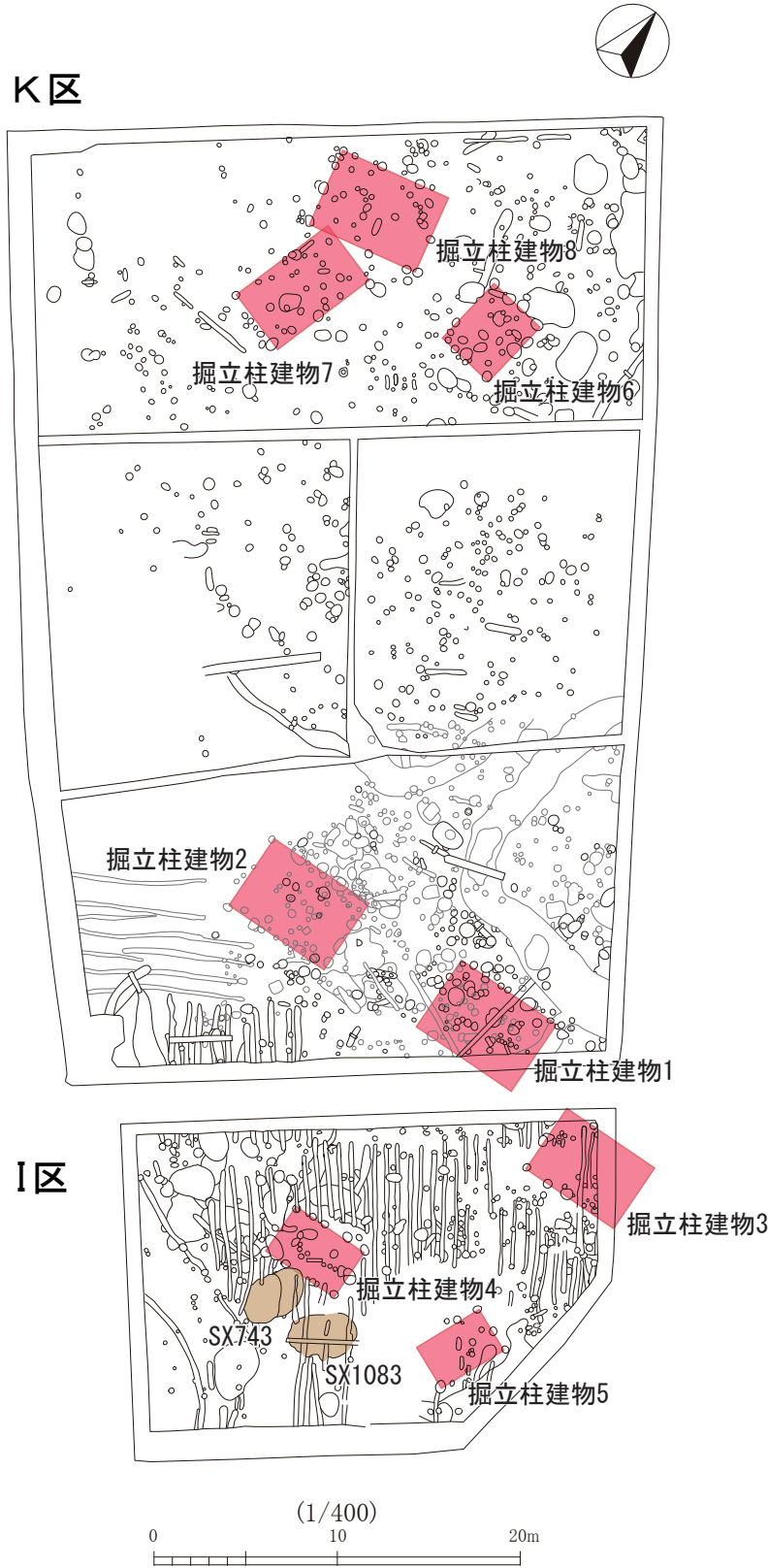
遺構はⅠ区とⅡ区合わせて8棟の掘立柱建物が見つかりました。また、Ⅰ区とⅡ区南側にかけて南北方向の耕作溝、Ⅱ区中央部で東西方向の耕作溝を複数確認しました。南北方向の耕作溝と東西方向の耕作溝の時期差や関連性については今後の整理調査で検討していく予定です。



土坑（SX743）



SX743は長辺3.7m、短辺2.4mの不整形で、遺構の性格は分かっていませんが埋土からは土師器の杯、高杯、須恵器の杯蓋が集中して出土しました。



調査区全体図

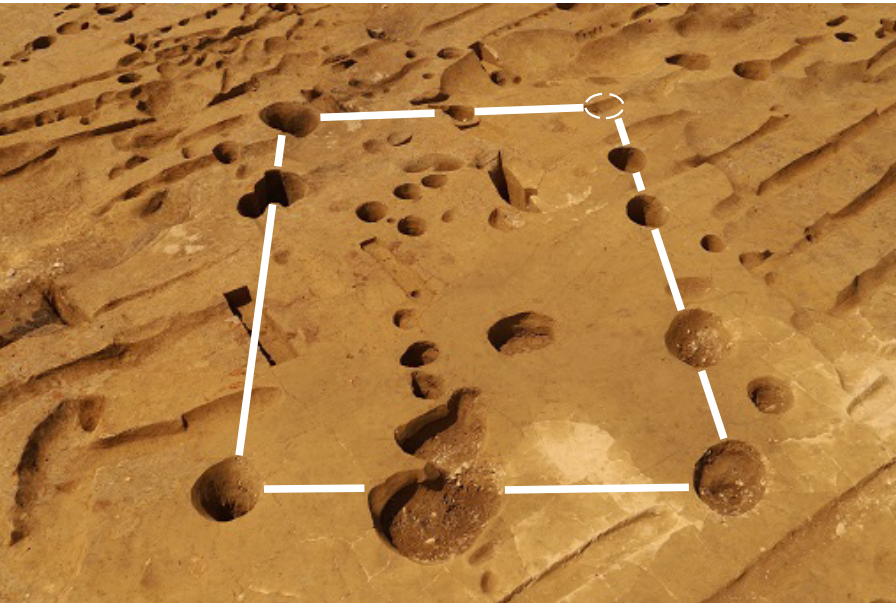


耕作溝



耕作溝から出土した須恵器

耕作溝は幅約30cm、深さ約10cmで、溝の底部には工具痕が確認できます。耕作溝からは7世紀末から8世紀初頭頃の遺物が出土しています。



掘立柱建物4

掘立柱建物4は柱間が2間×3間（3.6m×5.4m）の長方形です。柱穴は円形で約1.8mの間隔で並びます。

柱穴は耕作溝の上から掘り込まれており、耕作溝よりも掘立柱建物が新しくなると考えられます。さらに同規模の掘立柱建物7からは8世紀初頭の須恵器が出土していることから、その頃に居住域への転換が行われたと考えられます。